子どもたちへのまなざし (4)

デカルコマニー

松井　とし

入園した四歳児が園生活になじみ始めた頃、よく一緒にデカルコマニーをした。何色も用意した、美しい透明水彩の絵の具をたっぷりと筆にふくませ、真っ白い画用紙の上にポタッと落とす。次々いろいろな色を置いて、画用紙を二つ折にする。

そしてゆっくり開くと、そこには思いもよらない美しい模様が現れる。作った子ども自身にも、まわりの子どもたちにも、もちろん私にも全く予想のつかない思いがけないものが出現する。この『思いもかけないこと』が大きな意味をもつのであり、その楽しみにみんなワクワクしたものだった。子どもたちは熱中して、何枚も何枚も繰り返し楽しんだが、当然のことながら、そのたびに違った模様がうみ出され、いつも感心させられた。

創り出す喜びの後「私が作ったのパンダみたい」等と、ロールシャッハの図版のように

いろいろな形に見立てて、話がはずんだこともあった。

表面的にはこのような子どもたちの姿であったが、しかし、本当の意味は別のところにあったのだと思っている。

子どもたちは美しいものを創り出した成就感や自己の存在感を感じ、そしてそれらは集団の中で、自分を表すことの自信につながったことと思う。さらに『自分も友だちも一人ひとり、みんな違うのだ』ということの認識の芽生えを、おぼろげながら感じていたのではなかったかと思う。

一方保育者としての経験を重ねていた私にとっての意義は、この活動が日常性を超えて思いがけない、新鮮な驚きと、澄んだ瞳で一人ひとりの子どもに対する機会となっていたことであった。「すてきね」とか「きれいね」とかいった表面的な言葉ではなく、心からの感動や思いを一人ひとりの子どもたちに合った言葉で伝えることは、真の人間関係の親しみを増すことになったと思われるのである。

デカルコマニーは、入園間もない子どもたちが自信をもって自分を表し、友だちを認め合い、幼稚園の生活を切り開いていく過程において、意味のある活動であったと思う。

（元・幼稚園教諭）